

老は涙もえこそとどめね

高田 友

新古今集離別歌に俊成の作あり。

かりそめの旅の別れと忍ぶれど

老は涙もえこそとどめね

怕るらくは自ら旅立つにはあらで、俊成は都に留まりて、友の旅立つを歎きたりけん。

「えこそとどめね」は「えとどめず」なり。「涙をとどむることを得ず」の義なれども、「こそ」を挿みたるがゆゑに、「ず」の已然形と化して「ね」と變じたり。

これに對して、式子内親王の「玉の緒よ絶えなば絶えね」の「ね」は「完了・強意の『ぬ』」の命令形なり。「我が命よ、絶えんと欲すればすなはち絶えてしまへ」とは言ひたるなり。

それがし文語の苑に入會を許されたる砌には、既に初老の域に達したれども、雲の上にはシニア會員四人おはしまし、若手の方々もほぼ我が齡に同じ程にあらせらるれば、若者相手の詐欺師まがひの職より轉じて、俄かに若返りたるの思ひなりき。以來、「老人見習ひ」「初心老人」とは自稱してあり。

然りといへども、爾來旬年を閲して老醜日に日に加はり、「ベテラン老人」とぞなりにける。

閑話休題するに、近來我が朝にて、所謂「差別」は極惡の犯罪なりと糾弾せらるる所、人種・性別・出自・貴賤・履歴・職業・障碍・貧富・容姿杯、ありとあらゆる「人間格付け」の要素は排斥せらるるに至る。ただ、貧富・容姿などは、口より出づれば差別なれど、暗黙の了解にて自ら序列を作る。藝能界は容姿優れたる者の貴族社會にて、年間所得は庶民の百倍あるいは千倍、公然と醜貌を蔑視して、道塗炭に落ちたる澆季の世を闊歩して已まざる。

しかうして、如今「國政選挙はミスコンと化した」と言はるるあり。男女を問はず、端麗の人にあらざば、國會議員たるを得ず。さる評論家の「外國との交際上、外交に携はる政治家は外見も重要な要素なり」と唱ふるさへあり。已哉。

さりとして、貧富・容姿は人の目より見て優劣歴然、魅了せらるれば、天界の人と言はれんとも敢へて異を唱ふる能はず。いはば、「いはれある差別」なればなり。

今、ここに、「いはれなき差別」あり。剩へ、世に糾弾せらるる差別のうちに包含せられず。口にくだすも咎めらるるなし。餘にあらず、「年齢差別」なり。

すでに昭和の御代より、「政界の若返り」なるスローガンありき。「老害」（何たる差別語！）と譏りて、若者を引き立てんとしたりき。「老いては後進に道を譲るべし」とは、一重に偽善を翫ひけるのみ。「政界の若返り」を目したる顛末は、如何なる事態の出来たりけんと思召すや。

そもそも、若くして政界に打つて出でんとするは、親の地盤を繼ぐにあらずば、資産豊かなるに限らる。現今の國會、民主國家に比類なき世襲社會となりたるは、一にも二にも「政界の若返り」に起因したるなり。就中、二世にして活麴なる彼の若様の如き、常に綺麗事を口にして人口に膾炙し、未來の總理と囑望せらるるに至る。世の有權者諸氏、世界に冠たる大八洲の國をして滅亡せしめんとすや。

つらつら惟みるに、それがし古稀を越えてなほ分別具はらずといへども、不惑知天命の折の短慮の程を思ひ出づるに、慚愧、顔より焰叢の發するが如し。

日本國のかくも末期症状を呈したるは、一重に若者の政治に容喙するを以てならん。況んや、十八歳に選舉權を與ふるをや。むしろ抽籤にて選舉に替ふるにいつれぞや。

我が提案に隨ふなれば、すなはち日本國再生の契機となるべし。曰く、選舉權は四十歳、被選舉權は五十歳と革むるに如かず。嗤ひたまふなかれ、無茶を言ふなと難じたまふなかれ。かかる改革を行へば、我が國、堯舜禹の桃源郷とならんこと疑ひなし。

しかうして、今般安倍改正憲法に、蓋ぞ「七十歳に至らざれば位人臣を極むるを得ず」と明記せざる。あるいは、七十にあらで八十たらんにはなほ好ましからん。

首相は老人、主上は美しき若者と職務分擔するは如何ならん。

庶幾くは、令和の聖上陛下、御在位十歳の後、秋篠宮殿下を踰越して、悠仁親王殿下に讓位あらせられんことを。殿下は進次郎も及ばぬ活甞なり。

姉君御二方はいづれも美形にておはしまし、殿下の之に倣ひたまひけるは祝着至極、而して、學業成績また白眉にておはしますとの風聞、これすなはち神明（天照大神）の皇家を祐け給ひて、奇蹟の出來したるに相違なし。中学御入學に際して總代に選ばれ、玲瓏の御聲音以て式辭を告り給ひけるは、皇孫たるを以て優遇せられたるにあらず、洵にトップクラスの成績を擧げたまひければなりと傳へらる。次第に本稿「老人復權」の趣旨に背馳して若き貴人を讃ふるに墮したるは重々承知の儀なれども、英明にして眉目秀麗に渡らせたまふ主上を仰ぎ奉り、鈴木貫太郎を彷彿とせしむる執事のごとき老頭兒を總理に配するは東海の君子國たるにふさはしき御代たらんと言ふを得ん。

（令和元年六月二十五日受附）